



タイトル	日本から城が消える 「城郭再建」がかかえる大問題
著者	かとうまさふみ 加藤 理文
出版社	洋泉社
発売日	2016年8月19日
ページ数	283頁

戦後に再建された天守の多くはすでに50年を過ぎ、耐用切れの問題が浮上している。一方、名古屋城や江戸城などを中心に木造復元を求める声が高まっている。

しかし木造復元は、費用や材料の問題以前に、じつは法律の壁が大きく横たわっているにもかかわらず、報道では全く触れられていない。

はたして木造天守は建てられるのか？ 耐用切れの城はそのまま消えてしまうのか？ その答えが本書に示されている。

あなたの町の城も、地域をあげて真剣に考えなくてはならない時がすぐそこまで来ている。

さっそく、目次を見てみよう。

はじめに

序章 立て直しをめざす現場から

第1章 城郭再建の興り —— 明治～昭和戦前

第2章 文化財と乖離する再建 —— 復興のシンボルとして

第3章 バブル経済とふるさと創生のなかで —— 平成の城郭再建ブーム

第4章 巨大建築物をどう造るか —— 城郭復元の実際

第5章 どこまで進んでいるのか —— 城跡全域の整備・復元

第6章 浮き彫りになる城跡がかかえる問題点 —— 城の原景観と観光化

第7章 日本から城が消える

<特別編> 熊本城の地震被害状況と未来

あとがき

主要参考文献

全国の城郭復元・復興等一覧

全国各地で、やっと城址の景観保護についての動きが活発化してきた。環境保護や自然愛護の声に押されて、管理することなく放置されてきた城址が悲鳴を上げたのである。

台風による倒木、大型化した樹木による視界の遮断、樹木の浸食による石垣の崩壊、繁茂した樹木による史跡破壊等が、全国各地で起こってきている。このまま放置が続けば、倒木により国宝・重要文化財建築物が被害を受けることも想定される。……。

空襲被害について見ておこう。太平洋戦争末期の昭和 20 年（1945 年）、日本の主要都市はアメリカ軍による空襲を受け、至る所で燃え上がり、町は壊滅状態となった。当然のごとく、僅かに残されていた我が国の城を焼き尽くし、現在残る天守は、わずか 12 城のみである。

すなわち、弘前城（青森県）、松本城（長野県）、丸山城（福井県）、犬山城（愛知県）、彦根城（滋賀県）、姫路城（兵庫県）、松江城（島根県）、備中松山城（岡山県）、丸亀城（香川県）、松山城（愛媛県）、宇和島城（愛媛県）、高知城（高知県）である。

主要都市に位置する城も被害を受け、広島城、福山城、岡山城、和歌山城、大垣城、名古屋城、水戸城（茨城県水戸市）の 7 城もの天守が焼失している。

最も大きな被害を受けたのは、原子爆弾が投下された「広島城」と、沖縄戦で艦砲射撃の的となった「首里城」である。米軍による空襲は、軍事施設などを目標とした「精密爆撃」と、国民の戦意喪失を目論んだ無差別な「都市爆撃」とに区別され、木造建築の多い日本では、油脂弾（ナパーム弾：きわめて高温（900～1300 度）で燃焼し、広範囲を^{しょうじん}焼尽・破壊する）と焼夷弾（攻撃対象を焼き払うために使用する。そのため、発生する爆風や飛散する破片で対象物を破壊する）による焼き討ち的攻撃が主流となった。

原爆の被災を受けた「広島城」は、爆心地から約 1 キロ離れていた。天守は過重により跡形もなく崩れ落ち、城内の樹木は全滅し、堀一面の蓮の葉も焼け^{ただ}爛れてしまった。最も悲惨だったのは、水を求めて炎から逃れた人々が、この堀の中で多数死亡したことである。



全米ジャーナリストを対象にした「20 世紀の 100 大事件」アンケートが選んだ第 1 位は「原爆で日本を降伏させた」だった。

オバマが現職米大統領として初めて広島に立った。慰霊碑に献花した大統領は数歩下がり、数秒間、凝然と立ち尽くした。

女子供しかいない銃後の街の上に原爆を投下し、一番効果的に殺せる上空 500m で爆発させ、瞬時におよそ 10 万人を焼き殺した。米国主流のリベラル・プロテスタントははっきり「弁解出来るものは何もない、卑劣な非戦闘員虐殺だ」と言っている。

沖縄戦の戦火の犠牲になった「首里城」は、「鉄の暴風」と呼ばれる 20 万発の艦砲射撃により、一部の石垣を残し完全に破壊し尽くされた。城の地下に陸軍第 32 軍の司令部があったため、戦後、激しい艦砲射撃の弾痕が一面の水溜まりを作っていたという。



寺島尚彦・作詞作曲の「さとうきび畑」という歌がある。何度聞いても悲しい歌で、涙があふれてくる。歌詞の中に、「ざわわ ざわわ ざわわ むかし 海のむこうから いくさがやってきた 夏のひざしのなかで ざわわ ざわわ ざわわ あの日 鉄の雨に打たれ 父は死んでいった 夏のひざしのなかで …」。鉄の雨とは、あの「鉄の暴風」と呼ばれる 20 万発の艦砲射撃のことである。…………。

評者は福井県民であるが、関西から引っ越ししてきた折に、福井市をまず見ておこうと福井城を訪ねてみた。びっくりしたのは、福井城跡地には立派な福井県庁が鎮座し、県警、県議会の会館が隣接しており、さらに地下駐車場まであった。

福井県は県庁の移転を何度か考えたようだが、老朽化するまで待つ、近辺の商店街の移転反対などでほとんど進展は見られない。

地方には江戸時代の「城」の中に県庁舎のある例が数多くある。警察署、裁判所、公立学校、文化会館、図書館などの各種公共施設が城の中に密集しているケースも多く、中には職員が殿様気分だといわれる庁舎もある。例を挙げておこう。

- ・福島城址。福島県庁が立地している一帯が城址である。
- ・前橋城址（群馬県）。本丸跡地には 1999 年に竣工した地上 33 階・地下 4 階の群馬県庁本庁舎が置かれている。
- ・甲府城。山梨県庁の所在する一帯は甲府城内堀で囲郭された内城区域に当たるという。
- ・福井城。城郭の一部が現存する。現在の福井県庁は 1981 年に竣工した地上 11 階、地下 3 階で、中央は 9 階まで吹き抜けで知事室は日本一広い。福井城址内にある。
- ・駿府城（静岡県）。現在は、二の丸と本丸は駿府城公園として、三の丸には静岡県庁、裁判所、学校、市民文化会館などがある。
- ・岡山城。二の丸跡には山陽放送、林原美術館、岡山市民会館が、三の丸跡には岡山県庁、岡山県立図書館などがある。

- ・松江城（島根県）。城址は松江城山公園として利用されている。
- ・山口城。城内に山口県庁。
- ・高知城。下屋敷に高知県庁が建っている。
- ・佐賀城。城址は佐賀城公園として整備。本丸周辺は、佐賀県庁、合同庁舎、放送局、美術館、博物館など公共設備が立ち並ぶ。

本書のタイトルを見た多くの人たちは「そんなバカな！」と思うに違いない。

しかし、昭和30年代に、戦後復興のシンボルとしてRC（Reinforced-Concrete：鉄筋コンクリート）再建された天守が、はや60年を迎えてしまう。RC天守の耐用年数は、50年～60年とされているため、早急な対応策を検討しなければならない。あわせて、阪神・淡路大震災以降に顕在化した、耐震への対応策も講じなければならない。

耐震診断で「倒壊の恐れ」を指摘された松前城（北海道松前町）では、木造復元の可能性を検討。小田原城（神奈川県小田原市）では、耐震工事は実施されたが、地域住民を中心に「本物を」の声が強く、木造化構想に向けたシンポジウムも開催された。こうした木造復元の声が上がる中、声高に木造復元を訴えているのが、名古屋城と江戸城という我が国を代表する超巨大天守である。駿府城、甲府城、和歌山城も木造復元に名乗りを上げている。

だが、木造復元については、費用や材料の問題もあるが、その前に解決しなければならない法的な問題が大きく横たわる。今の法律を忠実に運用していけば、戦後復興された各地の天守が、今後もその場所に立ち続けることが出来ないかも知れない。そうしたことも十分考えられる。戦後、城が復興されたときの法律と、今の法律は全く異なってしまった。より安全性や利便性が優先された法改正は、「文化」を置き去りにしてしまっただけなのである。城は、「文化財保護法」だけでなく、「建築基準法」や「消防法」等、一般住宅のために制定された法律の対象となったのである。

福井県内でも、福井城、大野城、勝山城、玄葉尾城址、一乗朝倉氏遺跡、小浜城など評者が実際に尋ねたことのある場所も記載されている。北海道から沖縄まで、全国の城郭復元・復興等の一覧もあり、お城ファンには見逃せない情報が満載である。

城郭整備の歴史から、現状、事例、問題点などがリストアップされており、他に例を見ない歴史新書である。「日本の城」や、「山城歩き」（いずれも洋泉社）などと併用して読むとさらに理解が深まる。お薦めの1冊である。

2016.12.13